様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年　5 月 25 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2009
課題番号：18530642
研究課題名（和文）　近世日記史料に依る子育て文化の総合的研究
――時期・階層・地域性の解明に向けて
研究課題名（英文）　A General Study of Child-rearing Culture based on Diaries in the Early Modern Period Japan ; to clarify the periods, strata and localities

研究代表者
太田　素子（OHTA Motoko）　和光大学・現代人間学部・教授
研究者番号：80299867

研究成果の概要（和文）：　日記と自叙伝は共に心性史の重要な史料である。著者はこの研究で、主に近世日記史料を対象とした。日記は自叙伝と異なり、些末な日常的事実を執筆者の価値観とともに追跡することが可能な史料である。自叙伝には被教育者の側から自身の成長過程を回想する記述が豊富であるのに対して、日記は大人が子どもに対して抱く感情や日常的な配慮を記録している可能性がより大きい。筆者は、分家の可能性、通婚圏などが子育てに与える影響は大きいこと、子育ての目標や生活文化の階層差が大きいが、子育てを通じた階層移動の可能性も小さくなかったことを指摘した。

研究成果の概要（英文）：Diaries and autobiographies are important materials to investigate the history of mentality. In this research the author focused diaries in the early modern period in Japan. In diaries, compared with autobiographies, we can trace trivial everyday facts and writers' sense of values. In autobiographies we find many descriptions of memories of the process of writers growth from the viewpoint of education receivers, on the contrary, in diaries there might be records of feelings and care by adults toward children. The author mentioned that branch families and scopes of marriage reflected on the child-rearing, the differences of strata concerning the goal of child-rearing and life culture were wide, however there were possibilities of transfer through the child-rearing.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	700,000	0	700,000
2007 年度	600,000	180,000	780,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総　計	2,500,000	540,000	3,040,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：近世日記、子育て、親子関係、子宝、子返し、嬰児殺し、生育儀礼、

１．研究開始当初の背景

それまで筆者は、近世日本の嬰児殺し（子返し、間引き）の習俗を研究し、養育料支給制度など地方文書の中に子どもと家族の記録を探して実証的な研究を進めてきた。また、宗門改帳の分析による家族の存在状況の検討も行った。そうした中で、子育ての記録としての近世日記の可能性に注目し、日記に焦点化した研究を構想した。

２．研究の目的

おもに公刊されている近世日記を収集し、そのなかから子育て意識と子育ての習俗が明らかになるような記述を抽出して、17 世紀ー19 世紀日本の子育て文化について、階層差,地域差を抽出したい。

３．研究の方法

上記のような目的から、今回は数多くの日記を分析する点に力点をおき、そのなかで４年間に７点前後の重点的な日記の理解のために必要な範囲でフィールド研究を行なおうと考えた。

４．研究成果

（１）史料としての日記――主観的な体験を実証的に描き出す意義について。

研究の現段階では、武家や町人、農民、漁民など階層別に 70 点ほどの日記をこの四年間で収集できた。しかしまだ十分な分析には至っていない。比較社会史の視野から子育て意識や習俗の特徴について多少とも言及できるのは、武家と農村の日記のみである。収集を進めてきた日記そのものの整理と分析は、今後長い時間をかけて行なっていくことにしたい。

今回とくに注目した日記は、武家では『水野伊織日記』、『桑柏日記』、『燧袋』、相馬藩儒熊川家文書の『熊川兵庫日記』など、近世後期から幕末の地方都市、東北と中部、南西地方の中下級武士日記である。また子どもに関する記述が多い日記として、江戸在住の旗本の妻、『伊関隆子日記』の整理を始めた。この著者は、古代の女流文学に範を採った日記体の随筆を書き残したかったのであろう、日々の生活の中で関心を持った行事や慣習を歳時記風に書きとどめ、自分の幼年期の回想に立ち返ることも多い。さらに、孫たちの手習いを担当し、わずかだが教える工夫について書き残した部分もある。

農村の日記では、角田藤左衛門日記『萬事覚書帳』、『宗伊日記』（山形地方）、『継声館日記』と『重好日記』、『高関堂日記』であった。

近世の人々の家族関係と子育て意識をさぐる試みを研究の中心において日記の検討をおこなったが、同時期に進めた自叙伝の分析と比較して、近世農村の日記からは、子育ての習俗や意識の特徴的な問題が明らかになってきた。

自叙伝は、執筆の時点（多くは晩年）の到達点をもとに自己の人生を振り返りながら執筆する。執筆することが同時に自己の人生を解釈し納得する作業であるような場合が多い。拾い上げられる事実が記憶と想起、表現のそれぞれのプロセスで著者の解釈、意味付けの影響を強く受ける。主観的であるということ自体が史料としての価値で、その主観的表現の中から著者の内面を理解することに研究の主眼がある。

それに対して日記は、基本的には時間的に平行して（経時的に）出来事が記述されるところに特徴がある。そして、近世日記には記述の目的にかなりの多様性が認められる。近代の日記には、著者の内面の吐露、発散と表現をかいくぐった自問自答、自己認識の深化など、自我の働きを助ける役割を日記に期待するものが多くなるだろう。近世の日記にも、感情の吐露や自己分析をめざすものが無いとはいえない。しかし、より多くの日記は、事実を後世（多くは子孫）に伝えようとする備忘録、日誌として書き継がれた。何を重視して記述するかは、何を後の人々に伝えようと考えるか、という執筆の動機に制約される。執筆の動機という主観性に制約されることは重要な特徴であるが、正確な情報を伝えようとするかぎりにおいて、日常的な些細な事実までもが一定の目的に沿って丁寧に選びとられる可能性を持つ。正確な情報であるか否かというよりは、執筆者にとって重要な情報であるか否かに制約されながら、経時的な記録を得ることが出来るのである。

何を書くか、何を書かないかということの中に、執筆者の価値観や執筆の意図を見いだすことが出来る。と同時に、自叙伝や回想記では忘れ去られている些末な日常的事実を、執筆者の価値観とともに追跡することも可能なのだ。過去の時代の子育てという極めて日常的な営みを対象化する為には、子育てを大切に思い、こまめに記録する日記の中からこそ、当時を代表する子育ての記録、史料を得ることが出来る。従って自叙伝が被教育者の側から、自身の成長過程を回想する記述が豊富であるのに対して、日記は大人が子どもに対して抱く感情や日常的な配慮を記録している可能性がより大きいのである。過去の子育てを対象化する場合、この両者がともに重要な記録であることは明らかなので、それぞれの史料の性格をふまえた活用が求められる。

近世日記の中では、家の多面的な活動を全体として記述する家政日記の中に子育ての記録が記される可能性が大きいし、また大人の子育て意識を家の課題との関わりで理解することもし易い。しかし生育儀礼の記録や祝儀簿、門弟の記録や学校日誌など、次第に分化してゆく様々な家の記録類を併せて活用すること、共同体の区有文書や支配関係の日誌類

などとも対照させて活用する必要も出てくる。子育てというピンポイントで歴史研究をするという立場からの、子どもと子育ての記録の登場の仕方に関して、史料論が必要である。

（2）日記の中から浮かび上がる近世家族の子育て

それでは研究の現状において、どのような点が明らかになったのか。地域間、時代間、階層間比較という当初の目的からみると本当に限られた知見だが、以下明らかになった点と今後の課題を記しておく。なお、日記研究と地方文書（宗門人別改帳、赤子養育、捨子養育関係文書など）との比較という、もう一つの研究方法については別の機会に論じたのでここではふれない（太田 2007 参照）。日記相互の比較から見えてきた諸点にのみふれたい。

ひとつは、家内部における人間関係と子どもの立場に大きな影響を与える①家族形態や世代交替の様相および、②嫡男と次三男、女子のライフコースの様相である。傍系親族に分家の可能性がどのくらい開かれた家や共同体であったか、隠居慣行や隠居分家の習慣の存在、結婚や離家の年齢といった家族の構造や形態を規定する諸条件は、直接間接に子育ての性格に影響を与えていることが、改めて注目された。武家と農家には、それぞれ特徴的な生活文化が存在するが、それぞれの中での階層差の方が、分家や結婚、独立に与えた影響が大きい。とくに豪農の産育行動は中農や小作とは全く異なるものであった。家の分割が不利だと考える中農以下の農民とは異なって、豪農はむしろ多産主義によって自らの家の継承の基盤を強化しようとした。

親族ネットワークの形成という点で、女児の結婚が大きな役割を果たしたことは、近世前期の奥会津でも、幕末の山形や会津高田、播州でも同様であった。しかし、婚姻圏という点でいえば、近世前期の藤左衛門がせいぜい近隣数キロ内の村々の名望家層と深い交際を続けたのに対して、幕末豪農日記の場合の通婚圏は、約三〇キロから七〇キロの距離がある。それだけ広域の交流が意義を認められていたのであろう。子どもが成長する場としての親族ネットワークの空間を考える場合にも、この違いは考慮に値する。

それは、本家分家関係のニュアンスの変化につながる。近世前期の日記には、一緒に住んではいない兄弟の子どもに関しても、自分の子ども達と殆ど同じように記述されている。また、本家分家は従兄弟同士の結婚を重ねて、その結束を常に図っている。

いっぽう、幕末の農村では、甥や姪について自家の子どもと同じようなニュアンスでその消息を記したりはしない。親族が遠隔地に点在するようになったこととも関わるのであろう。また養子、婿取りの経過などからみて本家分家関係の結束が大事だと意識されていたことは変わらないが、それは生活を共にするもの同士の共感的な感情というより、社会関係としての本家分家関係のルールのようなニュアンスを持っている。

このように、生活空間の拡大に伴って個々の直系家族の独立性が強まった結果、家族内の人間関係はかえって明確で強い関心をお互いに持つようになった。

第二に、子どもに関する記録として日記に多出するのは、①生育儀礼、通過儀礼の慣習、②子どもの病と死、幼児葬法の記録、③手習いその他子どもの習い事の記録などである。生育儀礼は子ども期の観念や、人々が注目している年齢段階を表す。病と死、幼児葬法の記録は生命観や子どもへの愛着が表現されている。また、これらの記述の中には、当時の人々が子どもの資質や人格形成に何を期待していたかを、しばしば表現している。

近世前期の藤左衛門日記には、子どもの成長を祝うような生育儀礼は登場しない。乳児期の生育儀礼さえ記されず、子どもの出生より婚姻や成人儀礼に大きな関心が寄せられている。子ども期はまだ注目されず、若い大人に期待が集中している。

成人儀礼としては、男子一八歳から二〇歳に行われる婚姻前の前髪剃り、改名（元服）とともに、その前後に長男子は伊勢熊野への参詣が実行されている。婚姻、長距離の旅、一人前の仕事などは、だいたい十五歳から二十歳の間にクリアすることが予想されているから、若い人々は今日に比べて早熟に大人になっていったと思われる。手習いも既に必須と考えられている。

いっぽう、一九世紀前期播州の生活記録である『高関堂日記』や山形の『宗伊日記』では、家職の見習い以外は、同時代の武士の子どもに比べて比較的おおらかに手習いや学問が開始されること、学問と武術、算術の一通りの心得が必要だと考えられていたこと、修行の時期は一五歳から一七-八歳の間が適期と考えられていたこと、元服がやや遅めであることなどが書き込まれている。

なかでも嫡男が病気の父親に代わって懸命に家業をこなす記述など、家職の見習いを否応なく身につけていった様子は印象的である。また武家と比べておおらかとはいえ、近世前期の藤左衛門日記と比べると、手習いが早ま

っていること、青年期に「読書」つまり漢籍の講読、弓道、算術が習得されたことなど、習い事は多彩になっている。

また興味深いのは、乳児期の生育儀礼の盛んな様子だ。生後三日目の名付けや五日目の「初髪剃」、二・七日目に当たる「弓明」祝儀（忌明カ）、秋の恒例社参の際の初参り、初誕生の祝等など。藤左衛門日記には見られなかったこれら乳児期の生育儀礼に関していえば、贈られる祝儀が広域で流通する特産品であるなど商品化していることと、高い乳幼児死亡率にも関わらず生まれた子どもの生命に期待と執着を持つようになっている。

以上、これら農村の日記に記された生育儀礼は、乳児期と半元服・元服に重点を置く郷村型の儀礼慣行であった。ただし生育儀礼が「十三参り」を中心とする古風な儀礼慣行となっている『宗伊日記』（山形地方）については、その伝播のルートをさらに検討したい。

いっぽう幕末の下級武士日記では、従来から武家でおこなわれて来た生育儀礼、七五三祝儀に加えて、三月三日と五月五日の節句に子どもの祭として親族近隣のあいだで祝の品の交換が行われていることも見逃せない。節句祝儀には雛人形、紙人形、菱餅などが贈られ、返礼に菱餅を返している。また男子については端午の節句に甲や柏餅を贈った記録がある。武士の生活意識の中にも、商品化は浸透し始めるが、どちらかというと手作りの祝い品が多いのも武家の方だ。

そして第三に、日記に子どもの出生がこまめに記入されている場合には、子ども数や出産間隔、子どもの出生に対する感想などの中に、家族戦略として子ども数やその性別へのコントロールの意識が芽生えていたかどうかを知る手がかりが得られる可能性もある。そうした事例も１件あった。

第四に、日記の中に登場する下人や近隣の子どもの記録が、家族と子どものありようの階層性を示唆する場合が多い。とくに、子守りの存在など子育ての伴奏者のありようは、個々の家の事情による多様性を表すと同時に、小さな家族のなかでの子育ての負担の大きさかいま見せていた。また、祭りや生育儀礼をめぐる共同体の社交の記録の中には、子ども・子育てをめぐる共同体と家族の関係が示唆される場合がある。

（３）今後の課題

今回新たに 15 点 25 冊の農村の日記の中から、子育てに関連する記事を抽出しスキャンして子どもの記録に関するデータベースの作成を開始した。しかし、量的な史料の追求は個々の日記の性格についての検討を捨象してしまう為に不安も大きく、一つひとつの史料の丁寧な検討と平行して長い時間をかけてデータベース化を追求すべきだと、改めて自重する覚悟を決めた。

なお、これらの日記には乳児の生育儀礼や疱瘡儀礼、手習い，元服など子どもの記録が登場する。それらの記事のなかで、神官の日記に登場する安産祈願の記録が、新しく出会った種類の記録として興味深く思われる。また、乳児の生育儀礼の広がりや疱瘡儀礼の時期的な変容については、集めた記録の分析にこれから着手したい。

最後に、文字学習の問題がある。会津高田の『継声館日記』について史料紹介を中心とする研究ノートをまとめたが、田中文庫に残るほかの日記の記述とも関わらせながら、在郷商人の学習意欲の性格をさらに解明してゆきたい。家庭における文字学習に特化する研究も必要だと考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

1. 太田素子「郷学「継声館」の足跡と『継声館日記』の人々」和光大学現代人間学部『現代人間学部紀要』第 3 号、2010 年 3 月 185-196 頁、有査読。田中文庫に残された文書によって、郷学「継声館」の全容を解明するとともに、田中友蔵（のち東昌、昌之進慶名 1763-1838）重好（1788ー1860）父子の経歴、業績を検討。同時に、高田町の佐治家に遺る家系文書と照合することで、在郷商人の子弟教育の様相を検討した。郷学を、在郷商人の教育要求との関わりで検討する方法を検討している。
2. 太田素子「『継声館日記』にみる近世在郷町の識字状況」和光大学現代人間学部『現代人間学部紀要』第２号、有査読、会津高田の田中文庫に残る日記のなかの郷校の記録．135 人の寺子たちの詳細な学習記録を整理紹介．在郷商人の文字学習への動機を探る、2009 年 3 月、163 頁ー176 頁、有査読。
3. Motoko Ohta; How Children Learned to Read and Write in Eighteenth- and Nineteenth-Century Japan、Richard Rubinger　ed. ; Report of the Indiana Conference on Literacy in Japanese History , Translation Series No.3 (Summer 2008)　pp. 53-62　/total page 73, Center for Research on Japanese Educational

History Indiana University. peer reviewed
4. 太田素子「＜子育て文化の比較史＞によせて」『幼児教育史研究』創刊号、有査読。幼児教育史学会設立総会において、宮沢康人、小玉亮子らと行ったシンポジウムの原稿化. 幼児教育史学会編集発行、2007 年、日記研究の可能性に言及した。
5. 太田素子「家父長から「賢母」へ――近世武家社会における父と母の関係史」『歴史評論』第 684 号．2- 15 頁。＜特集・子育ての歴史＞、梓出版，2007 年、有査読。江戸時代は全体として、子育ての責任を家父長である父親においた時代だが、次第に教育熱心で有能な母親が登場してくる様子を、伝承譚や日記から紹介した。
6. 太田素子「江戸時代における人口制限と社会」『環』2007 年春号、特集＜少子化再考＞，藤原書店，2007 年、無査読。角田藤左衛門日記の中の出生コントロールへの意識性について言及した。
7. 太田素子「近世自叙伝・回想記の中の親子関係と子育て文化」『湘北紀要』27 号、2006 年，37-52 頁、有査読。近世日本人の自叙伝 6 点の中から、幼年期の回想を抜き出し、それらのエピソードに込められた子育て文化の性格を、同時代の日記の記録と比較しながら検討した。

〔学会発表〕（計 6 件）
1. 太田素子　「人間形成の社会史における＜家族＞」　教育史学会第 53 会大会記念シンポジウム『家族と国家』提案、2009 年 10 月 10 日、於名古屋大学。
2. 太田素子「人間形成の社会史におけるイエ」九州大学大学院人間環境学群コロキウム『イエと人間形成』提案、2009 年 2 月 17 日。
3. Motoko Ohta; ‘The childhood in autobiographies written in Tokugawa era Japan ; Diversity and decline of human building in community.’ The II International Conference on Community Psychology on Risbor,Portogy.2008.6.4.
4. Motoko Ohta; ‘How Children Learned to Read and Write in Eighteenth- and Nineteenth-Century Japan ‘The Indiana Conference on Literacy in Japanese History,2007.11.3.
5. 太田素子「＜子育ての歴史＞研究の課題と方法をめぐって」日本教育史学会 2007 年 6 月 23 日。
6. 太田素子「回想の中の幼年期／自叙伝による教育史研究の可能性」幼児教育史学会 2006 年 12 月 9 日。

〔図書〕（計 5 件）
1. 太田素子（単著）『家族と子どもの近世史』角川学芸出版、2010 年 9 月刊行予定。
2. 根ヶ山光一・柏木恵子編著『子育ての進化と文化』有斐閣　2010 年 6 月刊行予定、共書（分担執筆　太田素子「第 4 章　歴史のなかのアロマザリング」）。
3. 小山静子・太田素子共編著『＜育つ／学ぶ＞の社会史、自叙伝から』藤原書店、2008 年（太田執筆部分は第 1 章 24-79 頁，自叙伝と比較して、日記の中の回想記を史料として活用している。）
4. 教育史学会編集『教育史研究の最前線』共書日本図書センター、2007 年、（分担執筆 太田素子「第 10 章 2 節　子ども・家族・教育関係の社会史」P, 213-224。
5. 太田素子（単著）『子宝と子返し／近世農村の家族生活と子育て』藤原書店、2007 年（第 1 部が日記研究 49-160 頁）。この著作では近世農村の子育て習俗を、家の継承というシステムとの関係で分析した。子どもへの共感的な可愛がりと子返し習俗に、近世農村における子育ての光と陰が象徴的に現れていると考えている。農村の子育て意識を等身大に描き出すために、日記や祝儀簿、説話文学など、従来の歴史研究では実証性が低いと見なされてきた史料群を、実証の質を保ちつつ歴史研究の素材にする方法を追求した。全 428 ページ。この著作により，河上肇賞奨励賞、角川財団学芸賞受賞。

〔その他〕（計 3 件）
1. 太田素子「リプライコメント鈴木由利子氏の書評によせて」『日本教育史研究』2008 年 8 月。
2. 太田素子「リプライコメント荒井英次郎氏の書評によせて」『日本教育史研究』2010 年 8 月刊行予定。
3. 「書評 是澤博昭著『教育玩具の近代――教育対象としての子どもの誕生』」『歴史評論』2010 年 7 月号、2010 年 6 月刊行予定。